

先輩に続け

私が歩んできた道を振り返って

国立医薬品食品衛生研究所 医療機器部長
新見 伸吾 (にいみしんご)



早いもので、私は再来年の3月には定年となります。折角の機会ですので私が歩んできた道を振り返ってみたいと思います。大学では勉強に興味を持てず努力もしなかったため、再試験で単位を取ることが多かったです。人生の転機となったのは、4年生の時に卒論で微生物薬品化学教室に入ったことです。動機は特になく、クラブの1年先輩の新垣尚捷先生(現徳島大学薬学部准教授)がおられたことです。これまでと変わらない生活が続き、指導教官の

樋口富彦先生(現徳島大学薬学部名誉教授)から実験はしなくていいからノート整理をしまさいと言われ、数か月これまでの実験結果を丁寧にノートに整理する生活が続きました。その結果、考えることに興味があわき、もう少し勉強してみたいと思ひ修士課程に進みました。成果が論文として公表され、ますます研究に興味があわきました。その後、樋口先生の紹介で医学部の博士課程(酵素研酵素病理教室)に進むことになりました。それは大阪大学蛋白質時代の先輩であった中村敏一先生(現大阪大学医学部名誉教授)が助教授としておられたからです。博士課程ではかなり厳しい指導を受けました。次第に認められ4年生の時には精製した酵素の遺伝子クローニングのため九州大学医学

部遺伝情報施設に内地留学させていただきました。その時点では将来については決めていませんでした。

現在の国立医薬品食品衛生研究所(国立衛研)に入所したのは徳島大学薬学部衛生化学教室出身の早川堯夫先生(現近畿大学薬学部総合研究所長)との巡り合いによりです。当時早川先生は国立衛研の生物化学部(現生物薬品部)の第三室長になられたばかりで、研究員を探しておられました。当時酵素病理教室で助手をされていた田中啓二先生(現東京都医学総合研究所所長)はアメリカでの留学時代に早川先生とお知り合いであり、私を推薦していただきました。4年時の12月の終わりにRNAのサンプル調製のため九州大学から一時戻っていた私は、徳島市内の実家に帰省されていた早川先生と研究室でお会いし、それが事実上の面接となりました。そのころ国立衛研に入所するには基本的に国家公務員の上級試験に合格することが必要で、私の方では無理でした。そこで徳島大学医学部の助手にしていたので、大学からの異動ということで入所させていただきました。入所しましたが、予想していた通り皆

さん優秀でデスクワークではかなわないことがわかりました。そこで研究を中心として、主業務であるバイオ医薬品の品質に関する承認審査では早川先生に基礎から教えていただきました。最近では職務上厚生労働省及び医薬品医療機器総合機構等の委員として行政に関わることが多くなり、現職では20以上の委員会の委員を務めています。一番好きなのは実験をすることでしたが、生物薬品部時代の後期には立場上企業に対するバイオ医薬品の品質等に関する啓蒙活動にも関わり、国内外の研修会及びシンポジウムの講師及び様々な雑誌、単行本への執筆依頼も多くなりました。研修会では、講師が私一人で半日大阪と東京の連続とか1日中とかやりたくてもできないような経験をさせていただきました。また、様々な雑誌、単行本への執筆に際しては、製薬企業の方及び大学の先生に貴重な助言をいただきました。このまま定年を迎えるのかと思っていました。が、昨年4月から医薬品とは全く異なる医療機器の分野でお世話になることになりました。現在は研究生生活からは卒業し、部のマネージャーメント及び各種委員会への出席が主な業務となっております。

以上これまで私が歩んできた道を振り返り、私がかけてきたことは以下のようになります。まず、大事なのはモチベーションで、興味ある分野を見つけて徹底的に勉強することです。それにより生きた知識を身に付けることができます。社会では、自分がどこで勝負できるか見極めて、努力を惜しまずその分野を極めることです。また、自分の能力だけではどうしようもないことがよくあり、それを打開するには周りの方に助けていただくことが必要になります。そのためには助けを頼らうと思つていただけの信頼関係が必須となります。信頼関係の構築には、謙虚に打算を考えずに誠意をもって接することが必要になります。しかし、お互いに信頼関係を本当に構築できる方はごくわずかです。ちなみに私は人の縁という言葉が好きですが、大学時代は勉強だけでなくサークル等を通じて社会性に身に着けることも大事と思ひます。落ちこぼれから何とか這い上がってきた私の人生ですが、本寄稿が何か皆様の今後の参考になれば幸いです。

徳大生 大活躍!



総合科学部
社会創生学科 3年
長尾 亮太
(ながお しょうた)

東日本大震災から丸3年が経過した本年3月、全国47都道府県から1711名の学生が東北3県に集いました。徳島からも44名(徳大生25名)が参加。これが「きっかけバス47」です。春休みを利用して、東北はまだ真冬。ボランティアの数も少なくなる時期なのです。

進んでいるようで進まない被災地の復興。時間と共に、記憶と意識は薄くなっていきます。それを食い止め、再度復興の「旋風」を巻き起こそうと、この運動は二人の大学生から始まりました。

昨年7月に開始された活動は、40以上のメディアに取り上げられ、内閣府の被災者支援活動に認定され、観光庁の連携プロジェクトとして、早くも国民的運動にまで広がりを見せているのです。

長尾さんと、井上さんはFacebookの募集で、泉谷さんはバイト先でチラシを見て、北尾さ

東日本復興の「旋風」を全国の学生から!



この経験は、彼らの胸に何を残したのでしょうか。(出身地)
井上さん(徳島)「生まれて初めてのボランティアでした。被災された方の生の声を聞いて、行く前とは防災意識が大きく変わりました」
泉谷さん(和歌山)「テレビなどではわからないですね。本当のことは伝わってこないです」
北尾さん(鳥取)「実際の現場を目にすると、恐さが身にしみました。帰ってから下宿(アパート)にも備えをしました」
長尾さん(徳島、徳大生のきっかけバスのリーダーとして活動)「風評もありましたが、食べ物もいいし、旅行も魅力あります。

向こうの方は、ごく普通に来てほしいって言っています。今年も第2弾の募集がありますので、多くの皆さんに参加してほしいですね」
見ると聞くとは大違い、という言葉がある。わずかな行動でも、参加するということは、大切な経験を心に刻んだようです。



北尾泰広 (きたおやすひろ) 総合科学部 総合理数学科 4年
井上亜美 (いのうえ あみ) 総合科学部 人間文化学科 3年
泉谷依那 (いずみたに えな) 工学部 建設工学科 3年

